

出来事としてのガラス作品

Glass works as Phenomena

ガラスほど、存在existenceと見えappearanceとが分裂する素材はないだろう。その極限的な例は、窓ガラス（あるいはガラスケース）であり、鏡である。前者においてひとは、ガラスの向こうの景色や物品を見る。後者においてひとは、鏡に映った自分の姿を見る。窓ガラスにおいても鏡においても、ひとはガラスそのものを見ない。ガラスは、それ自身が消えることで役目を果たしている。ガラスは、そこに在るexistにもかかわらず、ガラス自身として見えてappearいない。存在と見えとは、ここにおいて決定的に乖離する。

光を透過させること、光を反射させること ----- それらは素材としてのガラスの重要な特徴である。そしておそらく、完全な透過と完全な反射のあいだで、ガラスはガラスとして気づかれ、見られ、その存在をあらわすのだろう。透過と反射とが或るバランスをとるとき、ガラスは、ガラスとしての見えをまとい、われわれの前にその存在をあらわす。

しかし、「ガラスとしての見え」とはどういうことだろう。われわれは、ガラスがどのように見えたとき、「ガラスの存在」に気づくのだろう。

ガラス以外の素材や事物において、一般に、見えappearanceと実在existenceは確かなかたちで結びつく。見えは実在に対応する。西洋の認識論は、主観と客観の一致を正しい認識と定義してきた：正しい認識のために、ひとは対象そのものをありのままに捉えなければならない。しかし、ガラスそのものを「ありのままに見る」とはどのようなことか。存在に対応する安定した1つの「見え」を示すガラスなどというものを、おそらくひとは想像することができないだろう。さまざまに見えるということ、光を含めた周囲の状況や見る者の位置の変化に従って刻一刻とevery moment見え方が変わるということこそが、ガラスの「ありのままに見える」ことではないか。言い換えると、一般的素材や事物において複数の見えが「ものそのもの」に収束するのに対し、ガラスにおける複数の見えは、収束せずに絶えずたわむれ、あるはずの実在existenceからずれつづける。見えのたわむれ、見えが実在に届かずずれつづける運動こそが、ガラスのガラスとしての存在をメタレベルで告知らせると言ってもいいかもしれない。

家住利男は、板ガラスを積層し削り磨くという技法によって、ガラスという素材のもつこのような特徴を作品にしていく。透過、反射、そして屈折がそこに関わっている。彼はガラスから見えを引き出し、それらを相互にたわむれさせる ----- この言い方は正確ではない；「見え」や「見えのたわむれ」は、作者が作り出したものではないからだ。彼が実際に行なうのは、板ガラスを接着すること、できた塊を削ること、磨くことである。積層ガラスの削られ磨かれた塊が、そこに出来上がる。「見え」や「見えのたわむれ」は、見る者がそれを見ることによって、はじめて生まれる。見る者viewerであるわれわれの「見る」ということ、より正確には眼球や身体の移動を伴う「見回す」ということ ----- それは必然的に或る特定の場所、状況における行為である ----- が、ガラスのガラスとしての存在をあらわれさせ

る。ここで作品は、即自ではありえない。作品の成立には、状況の関与、見る者の参与が不可欠である。作品は、向こうに対象として自己完結するものではなく、適切に加工されたガラスと見るもののあいだに、出来事 phenomena として成立すると言えるだろう。

例えば、家住利男の作品について、「深さ depth, profundity」がしばしば語られる。「深さ」は、現象学 phenomenology が好んで取り上げるように、「長さ」(それは客観的に扱うことができる)と異なり、特定の場所に位置する見る者との関係でしか意味をもたないことがらである。作品に「深さ」が生じるためには、見る者がそばに居て、それを覗き込まなければならない。「深さ」は、出来事のひとつである。

厳密に言えば、あらゆる「芸術作品」についても同様のことが見て取れるはずだ。しかし、ガラスという素材が「存在と見えとの乖離」(あるいは「緩い結びつき」という特性をもち、家住利男の作品がそのようなガラスの特性に依拠していることからすれば、ガラス作品とりわけ家住利男の作品が、より一層、出来事としての性格を濃く帯びるのも不思議ではないだろう。

森田亜紀

2006 チャペルギャラリー 展覧会図録